

2011年（平成23年）9月のワンポイントレッスン

崇武館
館長 飛鳥宗一郎

中学校武道必修正課に向けて

・・・空手道の立場から・・・

山形県空手道連盟

会長 飛鳥宗一郎 著

（その3）

第2章 武道を理解するために

9 武道と用語

武道を習っていると、一見スポーツと同じような行動なのに、違う言葉を使われ面食らうことがあるのではないかと思います。これらの用語や言葉遣いは、先人が頻繁に使った言葉であり武道固有のものとは断言できないが、スポーツの世界であまり使用されなかったからである。又5の「武道憲章」の中にもこれらの用語が頻出していたから、理解しているかいないかによって武道教育の効果に影響を及ぼす恐れがある。

これら用語の中には、武道の精神や思想がふんだんに含まれているため、おのずから武道とスポーツの違いが納得できそうに思う。中学校の武道必修化が人々の関心を集めている現状から、武道で使われるこれらの用語はどうしても承知してほしい事柄の一つである。

用語や言語表現は、その国の文化レベルを現すとされるほど密接に関わる。伝統文化として武道を教え、学ぶ立場において用語は重要な役割を持つ。

(1) 道の観念

「道」（どう）とは、人として歩むべき道（みち）、又は歩んできた道、そして今後歩むであろう道（みち）のことである。

藩政時代には、武道と武士道の言葉は同じ意味で使われたので、単に武術そのものを差す意味ではない。それは、武士として生きる道を武道としたからである。

明治15年（1882年）、嘉納治五郎によって柔術が柔道と改められ「講道館」が設立されて、武の修行を求道的手段と位置付けたが、近代における「道」の観念が一般化して武道種目名に「道」が付されるのは明治28年（1895年）「大日本武徳会」が設立された後、それも10年ばかり過ぎた頃からで、剣術・撃剣が剣道に、弓術が弓道に、更に薙刀道（後「なぎなた」に変わる）や居合道などになり、以降武術家も武道家となって定着した。

武道憲章の第1条に、『**武道は、武技による心身の鍛錬を通じて人格を磨き、識見を高め、有意の人物を育成することを目的とする**』と記され、武道各種目とも類似の言語で理念を掲げ、スポーツや遊戯と一線を画している。

「道」の観念は、足踏みして止まることを意味しない。日々心身の成長を目指すとともに、自他ともに肯定的な融和関係を前提条件としながら、結果より努力を重視し、技量の進捗は人間性の向上と並行するものと自覚し、社会構成員の一人として自立を確立し、現代に最も相応しい倫理観と道徳心を基にした人格形成へと発展させるのが、「道」へと踏み出す第一歩となる。即ち、「道」として歩む気概は、自分自身と真正直から向かい合う日々の対決である。

また、武道修錬を通して醸成される人間関係は、教える者と教わる者との間に緊密な信頼関係がなければならないことも、「道」の思想と深く関わり合う。

道は道義、道理、道徳、道心、人道、王道などの熟語をつくる。中学生たちに、今こそ他の手段では学び得ない、武道の中に充満する「道」の観念と直面してもらいたいものである。

(2) 稽古

「稽」は、「かんがえる」（寄せ合わせて考える）や「くらべる」（比較する）の字意で、「古」は「ふるい」「ふるびたさま」（古めかしい）や「いにしえ」（昔）の意味である。この二つから「昔のことを考え調べる」で、転じて「学問や学習をする」とか「武芸や芸事を習練する」となった。この用例は鎌倉時代が始まりとされるのが通説であるが、古事記の序文に見られるという説（筑波大学名誉教授・佐藤成明、1938年～）もあるが、これは熟語として存在しても、中世武道の場合とは意味合いが違うのではないかと思う。

稽古は、武道の他に習い事や芸能の世界でも使われてきたので、今でも『お稽古に行く』とか『稽古が進まない』などの会話や、「稽古始め」「稽古納め」の用語として使われている。

稽古の言葉は、正に論語「為政」にある『故（ふる）きを温（たず）ねて新しきを知る』（温故知新）のとおりで、先賢の残した技法や足跡を辿り、それを基にして更に新しい事柄や行動へと発展させ、躍進につなげる意志が本旨である。併せて、「道」の観念や子弟関係など古（いにしえ）からの道筋を無視するなという教えと捉えることができる。

最近では、新しい資料や手引書が出るたびに稽古の字句は消え、練習とかトレーニングに入れ替わるが、スポーツで使う練習とは別次元の思想が含まれていると確言できる。



第35代横綱・双葉山

ヘルシンキ・オリンピック（1952年）頃から芽生えたスポーツトレーニングを科学的な見地から捉える研究は、ローマ・オリンピック（1960年）で一つの山場を迎えて世界の注目を集め、以後日進月歩で今日に至る。科学的な理論や論理、新しい知識の習得に情熱とひたむきな向上心を感じる時、稽古と全く変わらない姿を見ることができる。

藩政時代の武芸者は、複数の師から教わる例は稀でなかったという。師匠が違えば技術技法に伴う運動性の強調点が異なる。とすれば、これは多角的な稽古の形態を意味し、結果的には総合的な鍛え方をしていたことになる。

第35代横綱で69連勝不滅の記録を残した双葉山（1912～68年）は、『稽古は本場所のごとく、本場所は稽古ごとく』の言葉を残している。

(3) 道場

道場とは、仏教の祖である釈迦が成道（悟りを開くこと）したその場所を意味し、サンスクリット語のボーディ・マンダ（bodhi-manda）から出た言葉で、「菩提道場」と漢語に訳された。

したがって、本来的に使われたのは仏を供養する所であり、仏道修行の場所であった。転じて、武芸などを教授し稽古する「稽古場」のことを道場と呼ぶようになったので、これは仏道と一緒に武道も命がけの修道であるという考え方からの借語である。

武芸が単に殺傷の手段から武道（武士道）へと昇華すると、その修練とともに道場の位置付

けも重要視されるが、戦国時代の終わりまで専用の道場（稽古場）は存在しなかったといわれる。

道場の呼び名が使用される始まりは江戸時代初期（宮本武蔵「五輪書・地の巻」に記載あり）からであるが、一般的になるのは柔剣道が旧制中等学校の教育に導入された大正時代初期からで、それまでは道場でなく「武道場」と呼んでいた。又旧札幌農学校学舎（通称「札幌時計台」）の場合は「演武場」となっている。

道場は、神聖にして冒してならない所であり、入場すれば居住まいを正し心を清浄に保って神前に礼をする。

道場では、礼節を重んじ師や先輩に恭敬の念を失わず、同輩や後輩に対して慈しみと助勢を怠らず、身勝手は慎み誠心誠意の気持ちをもって稽古に励み、粗暴や怠惰の念なく修行に努める場所と心に決める。

このように述べれば道場とは極めて堅苦しく、制約も多い所のように思われそうだが、道場における行為は武技の鍛錬を通して人格を陶冶し、識見を高め、修練が人を育てるという大前提があるからで、これは場所が問題なのでなく、体育館や空き地などで稽古すれば即ちその場所が道場となる。

(4) 試合

試合の文字から感じられるのは、文字通り試し合うことである。対戦する相手があって始めて試し合うことができるので、互いに武技上達的手段となる。現在、スポーツの世界でも試合の言葉は多用される。

試合の字句は、元々は「仕あうこと」、「互いにやり合うこと」を意味し、古くは「為合」「仕合」「仕相」と書かれ、後年になって「試合」に定着した。

試合を行うことは、自分の弱点を探り是正すべき課題を見出すばかりでなく、戦法の組み立てや戦略を試すうえでも掛け替えのない場面となる。

スポーツの世界では、競技とか、プレー、ゲーム、コンペティションなどの言葉が使われる。競技の言葉からは、勝敗を競い勝ちを得ることが最優先される感じが強い。

しかし、武道の試合は必ずしも勝敗のみを重視するわけでない。試合に至るまで積み重ねと、試合後における課題と対峙し、新たな目標へと向かう努力が重視される。この内省心が武道の精神の一つであり、勝利至上主義とは異なる価値観が存在する。

剣道でいわれる言葉に『打って感謝、打たれて感謝』があって、武道における稽古や試合の精神を如実に語っている。相手に対する感謝と称え敬う気持ちは、武道以外の勝敗を伴う伝統芸域にもあるので、相手を見下した勝利専行の行為が蔑まれる仕来りは我が国の文化に根付いている。したがって、武道には「ガッツポーズ」はあり得ないとされる。

武道の国際化は、我が国の優れた伝統的な身体文化位置付けられ、普及して久しい。これは喜ばしい現象である。しかし、競技規定に関しては多数決論理の西欧思想に圧され、発祥国の主張から掛け離れた変更を余儀なくされている。彼ら諸国には、その場限りの勝敗が優先し、上級者も下級者も身の回りの全てが我が師であるという武道の哲理が理解できていないらしい。

試合とか稽古に際して、筆者が最も忌まわしいとしている言葉に「痛めつける」、「苛める」、「ないがしろにする」（尊重しない）、「蔑む」（見下す）がある。相手から尊重されない行為を受ければ、後に残るのは恨みや憎しみだけで、感謝の気持ちなど一かけらも生まれるはずはない。大会の「選手代表宣誓」は『全力を尽くし、最後まで正々堂々と力の限り戦う』なので、これが相手尊重の柱である。



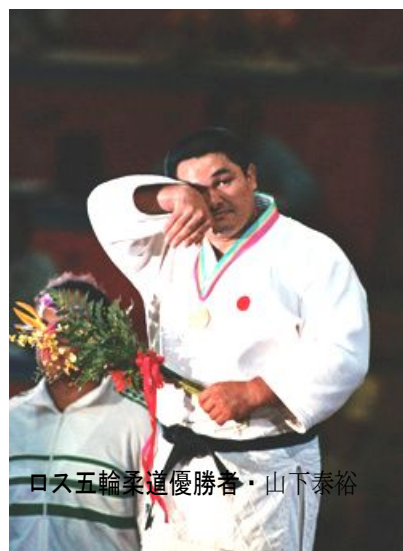
東京五輪柔道無差別級決勝戦

下泰裕と決勝戦を戦ったエジプトのモハメド・ラシュワン（1956年～）の正々堂々たる試合が後世まで語り継がれるように、外国人にも真の武道を知り修行として捉えている勇者はいるのである。

武道の試合における判定は、審判員の目から見た判断を基準とするところは主観に左右され、長さ速さ重さ等によって決まる客観的な競技と大いに異なる。審判員の長年の経験や技術の蓄積が問われる所以である。

東京オリンピック（1964年）の柔道無差別級優勝者で、昨年亡くなったオランダのアントン・ヘーシンク（1934～2010年、筆者は同じテーブルに同席したことがある。）は、決勝戦に勝利したとき、喜び一杯で試合場に駆け上がろうとした自国のコーチングスタッフに両手を広げて制止した。

他にも、ロサンゼルス・オリンピック（1984年）の柔道無差別級優勝者の山



ロス五輪柔道優勝者・山下泰裕

ロス五輪優勝の山下泰裕

(5) 勝負

『いざ勝負、勝負』とは、時代劇映画やテレビでよく見かける場面である。主役の善玉は苦心惨憺の末ようやく勝利し、悪玉や敵役は結局討たれる。

このように、争いごとや試合で最後まで雌雄を決するのが勝負の典型である。

決闘と勝負は違う。決闘は『両者の間に恨み又は解決し難い争論がある場合に、取り決めた方法で闘って勝負を決すること』（広辞苑）であり、同じく勝負は『争って勝ち負けを決すること』、又は『勝ち負けを争うわざ』と意味が異なる。

宮本武蔵と佐々木小次郎の闘いは「巖流島の決闘」といわれるが、これは作家・村上元三の創作表現であり、両者の間に遺恨はなかったと思われるから勝負といえる。



宮本武蔵・自画像

『試合に勝って、勝負に負ける』という言葉がある。これは、勝つことの価値や戦う態度の立派さ、勝負に際しての潔さなどを表現する。

武道の場合、試合を「競技」と呼び替えが多くなった今も、『勝負はじめ』の合図で開始される。勝ちと負けを決めるに際しては、勝負という概念が伴う。そこに「強い」とか「弱い」の第三者による判定が介入してくるから、オリンピックでも疑問判定が問題となる。

(6) 目付

「目付」とは目の付けどころをいうもので、目付きの善し悪しとは違う。「目付」は武道で相手と対峙した時の着眼点で、よく観察して最適なる対処法を選択し、最大の効果が期待できる目配りの用い方である。ただし、観よう観ようと目にばかり心が止まれば全体像が見えにくく、戦法も発見できなくなる。

宮本武蔵（1584～1645年）は「五輪書」水の巻で「兵法の目付と云事」と題し、『観見二つの事、観の目つよく、見の目よはく、遠き所を近く見、近き所を遠く見る事兵法の専也』とある。このように、名のある兵法家たちは目の使い方を語り残した。他にも、澤庵禅師（1573～1646年、江戸時代初期の禅僧で、1629年から3年間、出羽国上山・現在の上山市に流罪となり春雨庵に住んだ。）の「不動智神妙録」にある「千手千眼」や、柳生宗矩（1571～1646年、徳川将軍家の剣術指南役）の「遠山の目付」など、必ずといっていいほど「目付」の解説に引用される。

また、相手の全体像を観たつもりでも、心の中の動きまで洞察できなければ相手の意図するところを読み取れない。心の内に隠された動こうとする前の動きを見極めない限り、迷いの原因となる。眼力の強弱が勝負を決める場面も多い。

武道の世界で「心眼」という言葉がある。これは物事の真の姿である実態を見極め見抜く心の働きで、苦心の修行を重ねて初めて得られる、「観ながらにして観ない」中に生じる至高の境地である。

(7) 間合

「間合」とは、自分の手足や武具が十分届くという、単純な距離感覚や位置関係を示すものではない。「間合」が近いか遠いかは、各人の力量によって異なり、又一定の間隔が決まっているものではない。この双方の距離関係には幅があって、作戦や戦術によって使い分けされる。

稽古や試合の場面では、「間合」の感覚を養成する努力が払われ、「目付け」とも関連する。自分が適正「間合」と思えば相手にとっても適正「間合」の場合が多く、勝負は何時も自分不利か良くても互角と思わなければならない。

また、「間合」を外したり、危険を承知で相手「間合」の中に入ったり、相手の適正「間合」と思われるところで攻撃を誘ったりしながら機を伺う。このような駆け引きが勝負の常であるが、「間合」ばかり気が捉われれば反対に「間合」を見破られてしまう。

「間合」を盗むとは、相手の「間合」を操作して自在性を減殺し、自己の有利な「間合」をもって攻撃の機を生み出すことで、身動き取れない状態に置くことにより相手が無謀な行為に出てくる場合もある。

相手が変われば当然「間合」も異なるので、初心の内は自分の「間合」が掴めない場合が多い。訓練によって始めて状況に応じた操作が可能となるが、駆け引きにばかり走る小細工を避けなければ大成しない。

「間合感覚」は、十分な基礎訓練から生まれる。無意識に動けるまで稽古を重ねる以外に習得方法はなく、一朝一夕に会得できる芸芸ではない。スポーツという距離感覚とは異なる。柔道や相撲のように接触度が強い種目においても、「間合感覚」は重要な要因となる。

(8) 形（または型）

武道界では、「形」の字の場合と「型」の字を使う場合があるが、それぞれ意味と理由がある



日本剣道の形

の字を当てて進める。

武道は全て相対関係によって成立し、その技法も常に相手との変化や反応によって定まるが、「形」はスポーツというフォームとは違う。フォームなら、運動を効果的あるいは能率的に行える動作の追求から、「原則的な好ましい運動姿態」のことである。

「形」は無限ともいえる攻防技の手法から、それぞれの目的に適う理論的あるいは実戦的に優れたものを選んで組み立てられ、必勝に導く手段をもって構成される。「形」は生きており、一つ一つの「形」が個性を有し精神性につながり、又技法の歴史を語る。

ため、どちらが正しいかなど一概に決めつけはできない。

「形」の字は「すがた」や「かたち」のことで、実際に目に見える具体的な姿とその変化を表す。一方「型」の字は、物を作り出すものになる鋳型とか型紙のような意味で、「伝統や習慣として決まった型式」、又は「武技や芸能などで規範となる方式」をいう。

ここでは「形」



講道館古式の形

「形」の技法は、身体的表現であるとともに空間的（かたちを持つ）、かつ時間的（変化する）表現形体であり、動作の移り変わりとともに、緩急の動作を伴うものと解釈できる。

また、「形」は反復によって定形化され、最適な動作をもって編成される。「形」は、場面に即応して応用性の豊かな基本となるもので、身体をもって表現する機能体形でもある。



空手道団体形試合

各武道種目の持つ固有の技法を、その用としての効果を十分発揮できる身体操作は、効果効率面から節約体系とすることができる。無駄のない選りすぐったのものであるとともに、純粹体系と美的体系を合わせ持つことは、用と美の一致といえるかもしれない。

しかし、「形」の稽古にも問題点が皆無ではない。「形」は定形化されていることで予め次の変化（動作）が分かっており、機能的には閉鎖型の技能習得方法となる。

ところが、いかなる武道の場合も、固有の特徴を表現する基本的な動作となる主体が存在するため、それを学ばない限り次の自在変化の応用に進めないから、「形」の稽古は土台を作るための基礎訓練に止まらず技法の主体を構成する。心技体の進捗度合いに伴う各段階において新たな課題を発見することから、「形」は生きものであり絶えず進化すると言い切ることができる。

(9) 師範

師とは、学問などを多くの者に教える人のことである。範は、竹で作った型枠から転じ、はみ出してはいけない枠や手本となる型をいう。木で作った型枠は模である。

したがって、師範とは学道や技芸を教授する人となり、全てにおいて手本となり得る人である。現代は安直に師範を名乗る人を見掛けるが、中世から近世まで武技武術の礎が作られた時代には、その流儀・流派の持つ全ての技法を伝授され、習得水準（技量）も備わり、免許皆伝（完全相伝）の域に達した者に対し師範名の名乗りが許され、独立するか別派を立てことも自由となり、世間からも公認された身分資格であって、勝手に『自分が師範である』などと名乗ることはできなかった。

明治以降においては、警視庁や大学等で柔道・剣道などの師範職を置き、その場における最高位の指導者であるとともに、管理責任者として任を全うできる実力者を選任していた。明治15年に柔道を創始した嘉納治五郎のように、門弟から畏敬の念をこめて師範と呼ばれる人たちは存在した。

現代では、道場や各種団体、学校などで最上位の指導者を師範と呼ぶ習わしがあつて、特に習熟度や段位の高低による仕来りは消失したが、組織団体によっては師範資格を厳しく規制しているところもある。

古くは、「指南」とか「指南番」という言葉を使うことあつたが、指南も師範と同義で教え導

き教授をする人であり、中国の故事から出た言葉である。藩政時代には主に大名に仕えて武芸を教える人をそのように呼んだ。

今も昔も変わりなく、師範たる者は武道に対する造詣が深く、人格技量ともに優れ、模範となり手本となる示範ができることが要件である。

師匠という呼び方もあって、技芸・芸能の世界などでしばしば用いられが、かつては学問を教授する人を呼ぶこともあった。前述のように、師範は資格とか役職や立場上の意味合いが強く、師匠は直接教わる師を差している言葉であり、武道の世界で用いても支障はない。他に、宗匠は歌道、俳句、茶道、華道などの師匠を呼ぶ。「師範代」は、師範に代わり指導の手助けを許された者をいい、「代稽古」ともいう。

門弟（弟子）が師範に対し呼称するとき、「師範」と直には言わない。先ほどから述べてきたように、敬愛の念をもって呼ぶならば資格役職名の師範ではなく「先生」と呼ぶべきで、これが本来的な慣習である。

(10) 極め

「極め」とは、目的に適った技の完結形態をいう。種目によって違いはあっても、目的に適った完全無欠の技が行使され、心身充実の氣勢から生まれる終結形が「極め」で、単に上出来だったという状態とは違う。

「極め技」という言葉がある。これは相手の死命を制する究極の技の他に、勝ちを呼ぶに相応しい得意技も併せて呼ばれている。

武技には理想とする姿（形）があって、その理想に向かって研鑽に励み心身を鍛錬する。理想形は、先達から継承されたものに更なる工夫を重ねて生まれるもので、伝統と無関係ではない。

打つ、投げる、蹴る、突く、受ける、逆を取る、抑える、射るなど武道の技は歳月と努力を重ねて受け継がれ、これで良いという到着点はなく、生涯に及ぶ「道」と「技」の追求であり、その中で人は成長する。

試合や練習で、『上手く極まった』などと表現するが、意識評価の中で良かったとしても、「極め」は無我の境地の中に存在する難しさがあって、滅多に出るものではない。

(11) 残心

武の技を行使するとき、始まり（起こり）があって途中があって終わりがある。

「残心」とは、武技を目一杯に行使したとき、相手方に反撃の隙を与えない体勢と心構えが備わったときに発生する。

「残心」は、「形」や「対戦」の稽古から始まり、次第に高度な域に到達するように進み、弓道では矢が放たれた後の心身の備えに「残心」が必然と教えられる。

稽古や試合で「残心」が大切と言われても、隙を出さない身構えだけなら見せ掛けの「残心」で形骸化してしまう。「残心」の大切さは、技量と同時に精神的な修養を基に武芸の中に現れ、相手が反撃の隙を見い出せない至高の姿である。

武技の最たるものは、一刀両断や狙い通りの矢を放つことであり、一瞬にして勝敗を決する刹那の出来事である。剣道の世界では、渾身から発する完璧な技が極まったとき、瞬間無我の心境の中に真の残心があると教えらる。単に「隙を出さない」備えと、「武芸の完全性追求」なら大差であり境地の高低に関わる。

大相撲で「横綱相撲」という言葉がある。仕切と立合いで既に相手を圧倒し、突進を受け止め隙を与えず「寄り切り」で勝つ。見た目には面白味に乏しいとしても、名横綱といわれた人たちが示した残心の姿が思い浮かぶ。

残心は、武道だけでなく伝統芸能の中にも見られる固有の形態文化であり、行動美の極致である。



第48代横綱・大鵬の寄り

(12) 気合

気合とは、一つには何かをしようとしたとき、気持ちを集中させる手段であり、二つにはその集中した精神のこもった掛け声をいう。

前者は行動しようとする気の昂ぶり状態であり、その高揚度を表現して『気合が入っている』とか『気合いが足りない』などとなり、後者は気魄とともに全身から発する氣勢ある発声である。

宮本武蔵が著した「五輪書・火の巻」に『三つの声と云事』という項があって、この中で戦闘の場における声の出し方が記されている。いかにして命がけの場面で「気合」こもった発声が使えるかの方法で、生死を懸けた掛け声戦術といえる。

心理状態の充実度を表わす「気合」と、掛け声といわれる発声のうち、この項では「エイ」などの発声に絞って述べる。

力を発揮しようとするとき、武道では吸気と呼気を使い分けられるが、ここでは呼気を例に述べる。

技を行使するとき、意識に拘わらず吐く息とともに発声作用がおきる。全く訓練を受けていない人なら、どんな音声をしてでも咎め立てできないが、武道には作法に近い一定の指針があって、威嚇する声や唸り声、叫び声などは一線を画さなければならない。

往古の流儀は固有の発声法を持ち、それぞれに意味があって現在に至り踏襲されている。例えば、「イ、イェ、ヤ、シ、ホウ、ハ、エ、オッ、ソレ」その他で、伝統芸能の世界にも同様に特有の気合や掛け声がある。

一方、西欧諸国には行動を起こすとき声を発する習慣はなかったといわれるが、現代のスポーツ界では有効として取り入れている外人選手が散見される。

武道稽古や試合で、思うがまま声を出して「気合」とはいえない。現代は伝統的な「気合」

となる発声として、「エイ」「ヤァ」「トォ」の三種が主流で、この「気合法」が定形化するのには、大日本武徳会（明治28年創設）指針の影響によるもので、実際に定着したのは大戦後からとされる。時代劇などで剣道の先生のことを「ヤットォの先生」と呼ぶのは、道場でこれらの「気合」が激しく飛び交ったからである。

- ① 「エイ」は短氣息、即ち短い時間の中に集中して力を発揮するときに用いた。
- ② 「トォ」は中間氣息を用いるときに発した。
- ③ 「ヤァ」は長い氣息のときで、余韻を引く用い方もあった。

「気合」は、何も指導しなければ勝手気ままな発声となり、「ギャー」や「ワー」、「ウォー」など判別不明の音声となるが、慣れれば「エイ」「ヤァー」「トォ」も無意識に使い分けできるようになる。

気合の効用は、自分自身を鼓舞し、力を増大させ効果を高める工夫から行われたもので、瞬間力量を5~20%増大（行動によって違う）できるというデータがある。

最近では、これら気合発声の長短息の使い分けでなく、短氣息の「エイ」が主流となり画一化の傾向にある。「含み気合い」といって声を出さない気合もある。

(13) 演武

演武とは、武術の「形」や「立合」を仕来りに則り演ずることで、他には道場その他で武術の内容を披露するときにも使う。広義には、観覧に供する試合も含まれる。

藩政時代は、将軍、大名、師範の前で見分されたり、観衆の前で武技を演武することは多かったが、見世物や大道芸は演武といわない。

大学や高校など、新入部員獲得のため各部がデモンストレーションを行う。武道関係の部も格好の良いところを披露する演武会はよく見かける風景で、微笑ましい感がある。

また、神社の祭礼などで行う奉納演武がある。これは隣国の中国においても河南省鄭州の嵩山少林寺をはじめ、神社仏閣における奉納演武は今もって行われているから、中国から伝わった風習かもしれない。

演武はいかなる条件下にあっても、真剣に取り組むことが肝要で、持てる力を存分に発揮し試合と同様に最高の場面を演ずるよう心掛けなければならない。見てもらう楽しさと喜びは、生涯記憶に残るであろう良き場面となる。

(14) 鍛錬

武道種目で耳にする言葉に、「鍛錬に励め」がある。鍛錬とは、そもそも金属を鍛え錬るもので、鍛は金属をたたいて質を良くする行為、錬は溶かして不純物をより分け取り除いて良質なものを造りだす意味である。修錬を通じて技芸の質を高め鍛え上げることとなる。

鉄製刃物は切れ味鋭くなければ用をなさないし、車の心棒や鉄筋材は粘り強く変形が少なく長持ちするよう求められるなど、用途に合ったそれぞれの特性を持つ。

日本刀なら、鋼材を打ち延ばして縦横に重ねて打ち、これを繰り返すことで切れ味と粘り強さの双方を兼ね備えた、世界に名だたる刀剣となる。

武道の修行者も、鋼鉄を鍛えるごとく辛苦艱難を乗り越え、鍛錬を重ねることによって人格

と武芸が兼備された完成品を目指し、常に自分自身と向き合って一本の道へと進むので、鍛錬によって作り出されるのは、生半可な素材でない芯のある武人である。宮本武蔵は、著書「五輪書」の中で述べた『千日の稽古を鍛とし、万日の稽古を錬とする』は有名な言葉である。

英語ならドリル (drill) やプラクティス (practice) が同義に近い言葉で、鍛錬と同じく繰り返し訓練して教え込む意味において相通じる。又ドリルには、錐とか穴を空ける意味があるから、穴を空けるには強く揉み込まなければ深みに達し得ない。

(15) 段位と称号

古武道種目では旧来の制度を踏襲する場合もあるが、現代武道の多くは段位制を採用している。入門して間もない初心者にとっては、初段位獲得が最初の目標となり憧れでもある。現在の段位は、初段から十段までとなっている。

もう一つには、錬士、教士、範士などの称号があって、ある程度高段位に進み武技錬達の指導者に与えられるもので、範士が最高位である。なお、種目によって違う呼び名を作用しているところがあるが、この三称号で説明を進める。

段位、称号ともに種目の定める審査会によって認定され、最高段位や範士ともなれば人格識見が抜きん出て優れ、技術の全てに際立ち、育成や指導活動に他の追随を許さない実績を評価されて授与、或いは贈呈される。

先ず、段位について述べると、近世初期に武道は種類種目ごとに専門化 (分化) され、多くの流派も発生する。その頃は今と違い、流儀の「形」に象徴される部分を小分けして教授され、伝授された技法の段階的な証明書を師範が発行し、段位制度は存在しなかった。

武道と違うが、藩政時代に一早く段位制を採用したのは囲碁と将棋である。両者の中では、実力差が数的に捉え易かったのが主因で、その利便からである。

武道の段位制は、明治 15 年に嘉納治五郎が柔道を創始し講道館を開設した翌年、門弟 2 名に初段位を与えたのに始まる。剣道は柔道より遅れ大正 6 年 (1917 年) に段位制を取り入れた。

このように、段位制度は技量の進捗状況による昇進の証明としたところに、かつてと違った総合的な指導教習による枠組みに組み入れられたところに立脚している。ただし、格付けするにはそれを審査する立場の者 (審査員) が必要となり、基準はあっても数量的な根拠がないため、審査員の主観を基にし合議によって決められる。

称号を最初に採用したのは「大日本武徳会」(明治 28 年結成) で、同年結成記念第 1 回武徳会祭の大演武会に際し、優れた演武をした者に精錬証を授与したのに始まる。7 年後に教士と範士を、昭和 9 年 (1934 年) には精錬証を錬士に改め現在と同様に三階級が整い、戦中の昭和 17 年 (1942 年) まで 1 万人を超える武道家に称号が授与されている。

現在、各種目において段位制と称号制を併用し、「範士八段」のように使用される場合が多い。これが定着したのは「大日本武徳会」が解散となった終戦後のことである。

しかし、歴史的観点から、明治新政府の後押しによって設立された「大日本武徳会」の武道振興策から生まれた称号は、指導者としての権威付けと優遇措置の歴史を辿ることに留意すべきである。したがって、段位は実技力の精熟度によって格付けられるため実力の如何が問われ、一方称号の方は、武道指導者として権威の象徴的な要素が強い。現代の武道界においてこの並

列構造が定着しているが、その必然性と必要性に疑義を唱える論議は未だ聞いていない。

筆者の範士号の文面は以下の通りで、やはり重々しく権威的な感じが強い。

長年にわたり日本傳空手道の研鑽によって その蘊奥を極められた貴殿に範士の稱號を贈ります

(16) 寒稽古と土用稽古

近世における武術の稽古は、庭などの空き地や小屋などを利用しており、稽古場の環境は尋常でなかったため、現在のように快適な環境は望むべくもなかった。江戸時代中期以降、専用の稽古場（道場）が開設されるようになったと先に述べた。

武術に限らず、鍛錬の言葉でわかるように稽古は艱難辛苦を厭わず励むものとされてきた。寒中稽古や土用稽古（又は暑中稽古）は、武道修行者にとって至極当たり前の年中行事の一つとされた。

この稽古は、古くは早朝などの集中稽古が1か月も続いたという。激しく厳しさの度合いが強ければ強いほど、師匠は愛情をもって弟子に接したのもこれら稽古の場面だったと伝えられ、育成する熱情と学ぶ者の熱意が一致した温かさが感じられて好ましい。

厳寒期や猛暑期の練習環境は厳しい。だが、悪環境の下で辛い稽古を重ねる効果は、苦痛に耐え困難を乗り越え、不屈不撓の精神を増幅させ、剛毅の気風を養い、耐え忍ぶことで達成感を味わう方策として受け継がれてきた。

苦痛は、強い度合を体験し乗り越えることで、次の段階では同等の厳しさなら何時でも難なく耐えられるという確信を生む基因となる。

(17) 武道の十悪

我々人間は、生まれながらにして弱みといわれる部分を沢山抱えていると思わなければならぬ。だからこそ、修行によって少しでも改善するように努めるのである。

道場における稽古でも、思うように進展しないときなどその弱みなるものが頭をもたげてくるし、日常においても油断は禁物で注意を怠らないよう心掛けなければならない。

我が師で、和道流空手道創始者であり、神道揚心流柔術免許皆伝者で後に第四世の道統を継ぎ、空手道界最初に十段位となった大塚博紀（1892～1982）は、その著書「空手道」第1巻の中で、『武道には修行の害となる、十悪という戒めがある。』として、次の言葉を挙げているので、陥らないように心しなければならぬ。一言ずつ解説を加えなければならないが、それは別の機会に譲ることとする。

我慢、過信、貪欲、怒り、恐れ、危み、疑い、迷い、悔り及び慢心がそれである。

(第3章に続く)